

## 善寶寺五百羅漢像保存修復業務 2017年度事業報告

柿田喜則 KAKITA, Yoshinori / 文化財保存修復研究センター研究員・教授  
 笹岡直美 SASAOKA, Naomi / 文化財保存修復研究センター研究員・准教授  
 井戸博章 IDO, Hiroaki / 文化財保存修復研究センター常勤嘱託研究員

### 1. 善寶寺五百羅漢像保存修復事業について



龍澤山善寶寺 五百羅漢堂



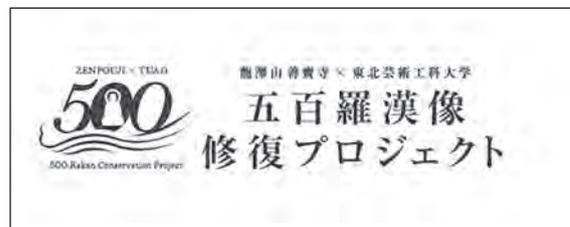
五百羅漢堂内

本事業は龍澤山善寶寺（山形県鶴岡市）五百羅漢堂内安置の500体を超える仏像群に対する保存修復事業で、宗教法人善寶寺（第42世五十嵐卓三住職）からの委託により2015年度に開始された。本修復は概ね20年間をかけて完了する予定で、大学の附置研究機関と寺院による事業としては異例の長期間であるといえる。

2015～16年度までに、堂内の保存環境や仏像の現状写真撮影と損傷状況調査、および2体の羅漢像の修復を完了している（前担当者・藤原徹／現

センター客員研究員）。

2017年度からは事業担当者が変更し、また東北芸術工科大学全体の協力を得て、本事業のロゴマーク作成や五百羅漢堂前への看板設置等を行い（中山ダイスケ／グラフィックデザイン学科教授、阿部貴博／同学科非常勤講師、他）、事業の推進と周知を進めている。



ロゴマーク

### 2. 2017年度事業概要

2017年度の修復数は12体で、五百羅漢堂内入口より向かって左面手前エリアに安置する像が対象（p.74参照）、12体のうち9体が羅漢像、3体が五百羅漢堂寄附者・発願者像である。修復業務は主に文化財保存修復研究センターにて行った。

#### 2017年度の主なスケジュール

4月	2017年度修復計画・調査
5月	善寶寺→文化財保存修復研究センターへ第1次搬出（寄附者・発願者像） 詳細調査・X線撮影・以降修復作業
8月	善寶寺→文化財保存修復研究センターへ第2次搬出（羅漢像） 詳細調査・X線撮影 以降修復作業
3月	修復後撮影・記録 文化財修復研究センター→善寶寺へ 修復完了像搬入

### 3. 修復概要

本事業においては、五百羅漢像を含む堂内の仏像が群像表現であることに鑑み、全体として統一感のある修復を目標としている。さらに、2016年度までの事業に関する改善点として、修復の進捗状況の可視化と明確化に留意し計画を遂行した。また仏像の配置と損傷状況の追加調査を行い、本事業のための再附番と損傷評価の見直しを行った。本報告に記載した附番は2017年度の再附番に基づいている (p.74参照)。



2017年度修復像 (画面向かって左側)



修復状況の可視化

五百羅漢堂は堂内の木札に安政2年(1855年)落慶であることが明記され、堂内の仏像群は同時期に制作されたと考えられる。像の品質構造は、木造寄木造・彩色または漆箔・玉眼・挿首である。制作から160年以上が経過して表面に塵埃が厚く

積り、多くの像は彩色や漆箔の破損・本体や台座の構造崩壊等の損傷を被っている。

羅漢像には漢字・漢数字による附番が元々なされているが、現状、本体や台座等に明記される附番の組み合わせの多くが不一致で、本体・台座・光背等が入替わり、また手先等の細かな部材が脱落や欠失する。

本修復において、処置を2段階に分けて計画した。第1段階として、①像の自立、②現状彩色の維持(剥落止め)、③台座構造の強度回復、を計画し、第2段階として、④欠失箇所の新補、⑤補彩を位置付けた。当初、第2段階の処置は複数年度にわたる一定数の修復と、像と台座の照合および脱落部材の照合が進行してから行うと計画していたが、群像表現として統一感のある修復を目標とした場合、第1段階のみの完了では各像の仕上がりのばらつきが統一感を阻害し、⑤補彩は不可欠であると判断し本年度より行った。また④欠失箇所の新補についても、今後、不足している部材が発見される可能性が高い場合は、当初計画通りに補作を行わなかったが、発見の可能性が低く、かつ修復による美観の回復を妨げる箇所が欠失していた場合は補作を行った。

①像の自立・③台座構造の強度回復については、主として台座への処置が該当した。羅漢像の台座は制作時からの構造的な問題として、部材同士の接着機能(主に膠による接着)が失われると解体崩壊する構造になっており、本年度修復対象のうち3体の台座は部分解体が進行していた。そこで、すべての台座内部に新たな部材を追加し、構造補強と改善をはかった。また、12体中羅漢像1体については、像自体が分解しており自立が不可能となっていたため、本体の解体と構造補強をおこなった。

附番の異なる本体・台座・光背について、元の組み合わせが見つからなかったものは、本体と台座を微調整した上で現状のままとしたが、光背については明らかな違和感(物理的に挿しこめない・頭部と高さが合わない)が判明したため現状では設置せず、別保存とした。修復事業が進行するなかで附番を照合し、組み合わせを見つけて戻す方針とした。

また五百羅漢堂(安置場所)と文化財保存修復研究センター(修復場所)に環境落差があることが判明した。五百羅漢堂内に設置した温湿度ロガー11台から収集したデータと文化財修復研究セ

ンター内作業場所の状況を比較したところ、温湿度の推移に大きな差があり、特に湿度についてはその落差が判明した。五百羅漢堂内の年間平均湿度はおおよそ80%なのに対し、センター内作業場では40%を下回ることもあった。環境差は羅漢像の二次的な破損に直結するため、落差軽減の対策として作業空間の湿度管理に留意し、善寶寺五百羅漢堂の湿度条件に近付けた専用の空間（移動式ビニールハウス）を設置して対応した。

#### 4. 修復報告

12体の羅漢像および寄附者・発願者像は、2回に分けて五百羅漢堂からセンターへ移送した。

修復処置前には、全体と部分の写真撮影・損傷状態や法量確認など目視による詳細調査・X線調査による構造調査・二酸化炭素による殺虫処理をおこなった。修復処置後は全体と部分の写真撮影・記録をおこなった。

本修復に使用した主な修復材料は、剥落止めの材料として主に牛膠・布海苔を使用し、損傷状況に応じてアクリル樹脂・セルロース等を併用した。部材の接着には、矧ぎ面にアクリル樹脂を塗布した上で、エポキシ樹脂系化学反応形接着剤や中性PVA c 接着剤を使用した。補彩にはアクリル絵の具・日本画顔料を併用した。

また像の搬出入時や詳細調査には、本学美術史・文化財保存修復学科保存修復コース立体修復専攻の修士1年生や4・3年生の学生を修復に関する事前授業を行った上で参加させ、修復現場の体験教育とした。



像の搬出

さらに同専攻4年生の2名（栗原典子 KURIHARA.Noriko・斎藤里歩 SAITO.Riho）が実際の修復作業に携わった。栗原典子は卒業研究『龍澤山善寶寺所蔵「木造伊達林右衛門像」の保存修復 剥落止めにおける膠とアクリル樹脂・パラロイドB-72の比較』（2017年3月）を成果として発表した。

#### 4-1 五百羅漢堂寄付者・発願主像

像高約34～36cm（3体）

衝立高48.0cm 衝立幅133.7cm

衝立奥14.4cm

【画像向かって左より】 栖原六右衛門（寄付者）・  
伊達林右衛門（寄付者）・清水平三郎（発願主）



修復前



修復後



X線調査（清水像）

3像の安置場所には各像の名前などを明記した木札が打ちつけられており、本修復ではこれを採用している。ただし、衝立に隠れていた段側面材には、木札の順とは異なる像の配置が明記され、何らかの理由で現在の配置に変更されたことがうかがえる。



像前には名前を明記した木札



衝立裏の段側面銘文、かつての配置か

清水像の首底に「畑」の文字を確認した。当センターの『平成22～26年度「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」成果報告書』（岡田靖 石井紀子・p73～78・2015年）や『江戸時代後期における京都仏師の東北地方進出と在地仏師の動向』（長谷洋一・関西大学文学論集66-2・p129～149・2016年）などから、「畑」は七条仏師の正流仏師31代康朝の弟子にあたる畑次郎右衛門の系譜の可能性が考えられる。



清水像の首底、仏師名の可能性が高い

※修復作業（伊達像）：栗原典子  
（栖原像）：斎藤里歩

#### 4-2 羅漢像【24-31】

総高（框地付～頭頂）64.7cm

框座高7.5cm 框座幅47.5cm 框座奥33.7cm

※框座法量は羅漢全像にはほぼ共通

本体・台座（岩座・框座）・持物に「三百六十五」と明記される。光背のみ「二百七」で、設置した時に本体と高さが合わないため別保存とした。

岩座と框座内に「よし■（川か）／ゆひをし」と明記されていた。

主な損傷は、全体を厚く覆う塵埃と彩色の剥離・剥落であった。



修復前



腰部、彩色の剥離・剥落



修復後



膝前、塵埃の付着



X線調査

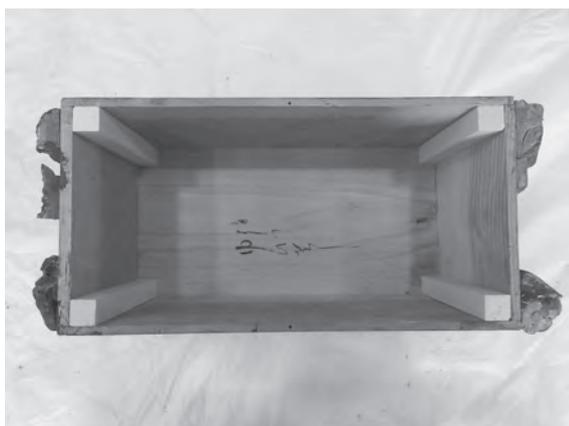


肩、塵埃の付着と彩色の剥離・剥落

羅漢像の台座は制作時からの構造的な問題として、部材同士の接着機能（主に膠による接着）が失われると解体崩壊する構造になっていた。全羅漢像台座への共通の処置として、新たな構造材（ヒノキ材）を追加した。



框座内の補強（全羅漢像框座に共通で補強）  
および、天面裏に銘文が明記



岩座内の補強（全羅漢像岩座に共通で補強）  
および、天面裏に銘文が明記

#### 4-3 羅漢像【25-29】

総高（框地付～光背）76.3cm



修復前



修復後



X線調査

本体・台座（岩座・框座）・光背に「三百五十四」と明記され、すべての附番が一致していた。

#### 4-4 羅漢像【25-30】

総高（框地付～頭頂）65.1cm

岩座内に「福嶋作／岩ニ付」と明記される。「福嶋」は仏師名か。



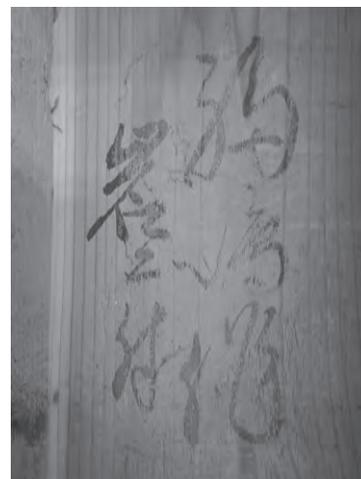
修復前



岩座内部



修復後



岩座内部の銘文



X線調査

本体・台座（岩座・框座）に「三十五番」と明記される。光背には番号の明記がなく、設置した際に本体と高さが合わないため別保存とした。

4-5 羅漢像【25-31】

総高（框地付～光背）77.5cm



修復前



修復後



X線調査

本体・光背に「四百九十三」と明記される。岩座は「四百三十三」で、本来の岩座が発見されるまで現状のままとした。框座は「三百二」で【26-30】岩座と符合したので、入れ替えを行った。

4-6 羅漢像【26-29】

総高（框地付～光背）78.5cm



修復前



修復後



X線調査

岩座・光背に「筆葉」と明記され、本体に銘文はないものの、持物と合致しており、岩座・光背と一具と考えられる。框座は「珠ず持」と明記されるが、現状のままとした。

4-7 羅漢像【26-30】

総高（框地付～頭頂）67.3cm



修復前



修復後



X線調査

本体は銘文なし（光背受を欠失）、岩座「三百二」、框座「三百四」、光背は無番であった。本岩座と【25-31】の框座「三百二」とが符合したため、入れ替えを行った。

4-8 羅漢像【26-31】

総高（框地付～光背）77.0cm



修復前



修復後



X線調査

本体・台座（岩座・框座）・光背に「三十四ばん」と明記され、すべての附番がそろっていた。

#### 4-9 羅漢像【27-29】

総高（框地付～頭頂）66.0cm



修復前



修復後



X線調査

されていた。本体と台座は現状のままとし、光背は本体との高さが合わないため、別保存とした。

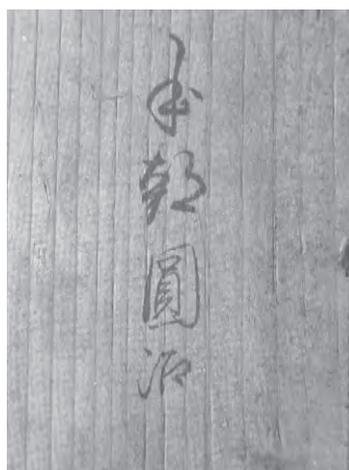
像底には「本朝圓治」と明記される。



体部・膝前・裳先に解体



像底



像底の銘文

本像は本度修復対象の中で最も破損が著しく、彩色の損傷が甚大で、さらに本体・台座はほぼ解体状態にあった。本体「二百十八」、台座（岩座・框座）「二百三十四」、光背「三百七十六」と明記

#### 4-10 羅漢像【27-30】

総高（框地付～頭頂）66.1cm



修復前



修復後



X線調査

本体には銘文がなく、台座（岩座・框座）に「四百七十三／山七」、光背「三百二」と明記される。框座の岩が本体と当たるため一旦岩を取り外し（別保管し附番が合致する本体が判明した時点

で付け戻す）、設置を調整した。光背「三百二」は【26-30】の岩座と【25-31】の框座に明記された附番と合致するものの、【26-30】の本体は光背受を欠失している上に附番の明記がないため、現時点では別保存とした。

本像は表面の汚損が他の像よりも著しかった。



糞（ヤモリか）が彩色表面に付着

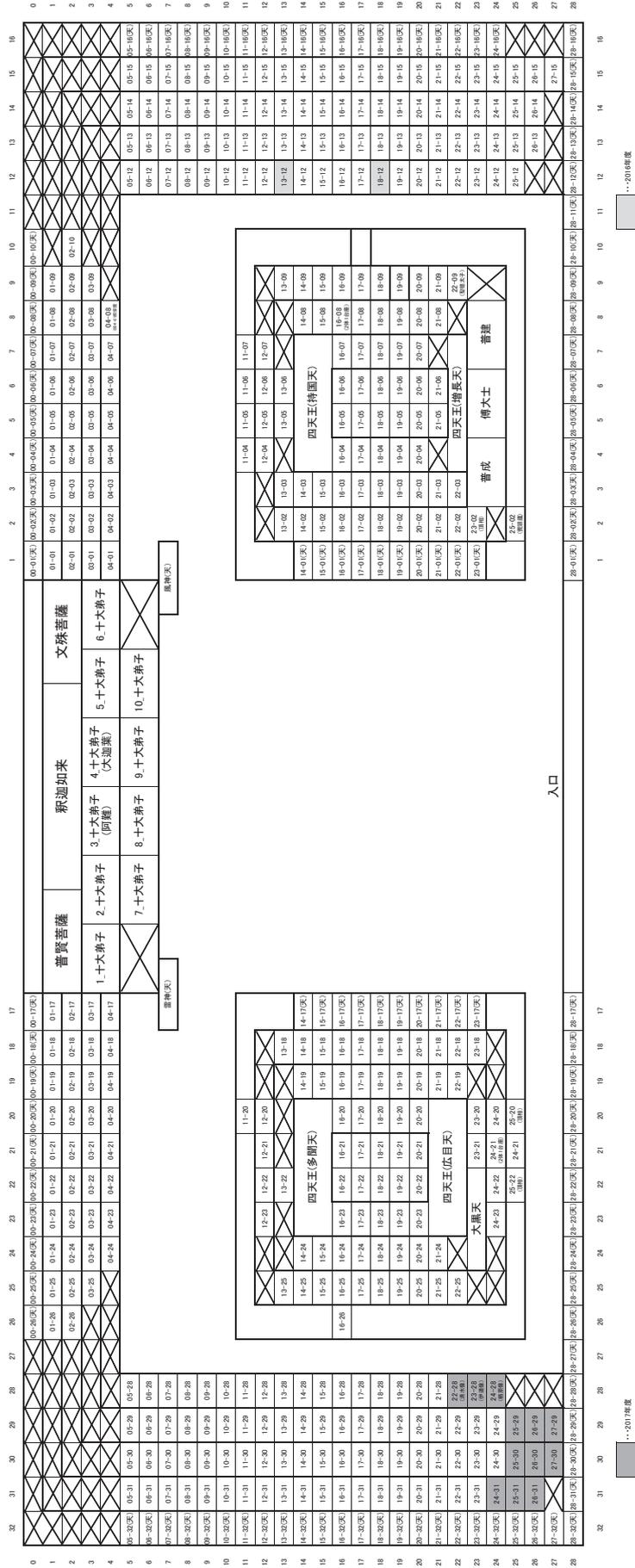
#### 5. 今後について

本年度の修復によって、羅漢像のより具体的な状況が明らかになり、次年度以降の修復内容の改善や進歩につなぐことができた。

また、本年度以降も本学学生が関わることで、善寶寺や修復事業に関連する事柄が卒業研究対象となり、研究の継続的な蓄積は将来的に大きな成果につながると考える。

本事業の特色のひとつは20年にわたる長期プロジェクトであることで、数年度先までの計画内容を善寶寺側に提示しつつ、円滑な計画推進をはかる必要がある。通常の事業における修復設計や処置内容の計画だけにとどまらず、将来的な担当者の交代および修復者の増加・拡大を念頭に、短期・中期・長期の各段階の進捗を関係者各位と共有できる仕組み作りを検討する。

龍澤山善寶寺五百羅漢堂内 仏像配置図



...2016年度

...2017年度